

## 未来を生きる子供を見据えて

最近、学校に関する話題が多い。

ふと頭に浮かんだものでも、いじめ、学力向上、外国語教育、道徳、特別支援教育、不登校対策、貧困対策、給食費等の公会計化、教職員定数、学校規模、フリースクール、教員の多忙化、部活動指導・・・どれも重要な課題であり、早急な対策が必要だが、中には解決が難しい問題もある。これらばかりに注目すると、教育は暗いイメージになってしまいそうだ。

(今、このような解決が難しい問題へ対応できる人材育成が求められていて、それを、子供にばかり求めるのではなく、我々大人が試されているかのようだ。)

立法の立場、行政の立場、教員を含む学校の立場、保護者の立場、研究者の立場、それぞれ教育に対する視点はちがうこともあろう。教育に関わる者としては、それぞれの課題は複雑に関わり合うために、全体を俯瞰して問題提起をし、議論しなくてはいけないと感じている。

さて、学校を訪問すると、子供たちは元気である。

特に、義務教育では、地域のさまざまな子供たちが学ぶ場なので、それぞれの学校に特色や取組、そして課題がある。教育行政の立場からすると、それぞれの学校や先生に課題が見えてくるが、先生方は、子供たちのために一生懸命がんばっている。教員出身者としては、「先生方、健康に留意しながらよろしくお願いします」と応援している毎日である。

さて、先日、ある小学校の学校だよりを読んだ。

校長先生は、『『21・5世紀を拓く』という研究をしている』と書いてあった。

2050年に、最上級生(小学校6年生)は46歳になり、大人になったその子供が、この学校で学んでよかった、役に立ったと思えるような学校にするための研究をしているようである。

近年、新自由主義による成果主義が様々なところに導入され、指標が向上するように求められる。このことも重要だが、人は100歳ちかくまで生き、学校卒業後も成長と発達を持続する。学校における学びの成果が早く現れる方、ゆっくり現れる方と様々である。どのような制度、社会になろうとも、人の教育に携わる者は、この長期の視野を持たないといけないだろう。

私の手元に現学習指導要領が公示されようとしていた平成19年の新聞をスクラップしたノートがある。(当時、教務主任をしていたので、情勢に関心があったのだろう。)

当時の渡海紀三朗文科大臣のコラムがある。「教育に市場原理はなじまず」という見出しである。今もこのような考えは大切だと思うし、そうあってほしい。

さあ、先ほどの校長先生。こんなことも書いてあった。

「私は90歳になる。何としてでも生き抜いて、今、目の前にいる『大人になった』子供たちから『校長先生、〇〇小学校で勉強したこと、役立ったよ』と言わせてみせます。」と。